

病理を担当する検査技師が明日からできること

- 永谷たみ¹⁾、田淵裕子¹⁾、廣尾嘉樹¹⁾、井上瞳¹⁾ 春名勝也¹⁾
 山本繁秀¹⁾、河田卓也²⁾、堀田真智子²⁾、和仁洋治²⁾
 1) 姫路赤十字病院 検査技術部 2) 同 病理診断科

【はじめに】

生検組織の取り違いが病理検査に関する医療事故でしばしば問題となっている。我々は自施設での内視鏡生検で、同一患者の複数採取された組織枝番号間違いと、近隣施設での同日採取された2患者の乳腺生検組織取り違い事故を教訓にした組織検体の識別及び検証可能な方法として組織検体に着色し、その効果を検討した。

【材料と方法】

Thermo 社製ティッシュマーキングダイ5色を順に竹串を用いて直接組織に塗布する。

1：乳腺生検組織

ベッドサイド組織診の際、固定前にその場で組織に着色し、伝票に同色のシールを貼る。

2：内視鏡生検組織

切出し時に、生検組織の枝番①赤、②緑、③青、④黄、⑤黒、⑥紫 と着色する。

【検討内容】

切出し、包埋、薄切、組織確認の操作で着色による影響を検討した。

【結果】

着色する場合は、着色しない場合に比べ、切り出しに時間を要するが、ブロック、プレパラートに色素を確認することが出来た。

1の場合、どの組織においても十分な着色が得られ、伝票のシールの色と組織の色が同色であることを、各工程で確認できた。

2の場合、各工程で色の違いにより枝番号の識別が可能となった。

鏡検に際して、非常に小さい組織、断片化した組織では、間質に色素が入り込み、標本観察に支障があり不向きであった。色別では、黄は胆汁色に似ており、黒は色の主張が強く特に小さな組織には不向きであった。色素の量が多い場合、色素が結晶化した場合には若干見づらい症例があった。最終的に診断医に好まれたのは、赤、緑、青の3色であった。

【考察】

着色は、大掛かりなシステムの変更を必要とせず、必要経費もわずかである。万が一取り違いが起こった場合でも、検査技師が取り違えたものか、そうでないかを明白にすることが可能となった。乳腺生検組織において、色素は捺印細胞診標本、免疫染色標本でも確認することができ、組織の取違い防止には非常に有効である。内視鏡生検組織の枝番と着色する色を固定することにより、組織片が分割した場合なども容易に枝番を認識できる。さらに、新人技師の包埋、薄切操作が容易となり、ストレスの軽減にもつながっている。

【結論】

複数患者の類似生検組織や、同一患者の複数組織において、着色は操作過程の検証を可能とし、検体取り違い防止に有効な手段と考えられた。

連絡先 姫路赤十字病院
 (079) 294-2251 内線 2203